

I-2 障害（者）の範囲 素案

【表題】法の対象規定

【結論】

- ~~障害者（障害児を含む）以下、同じ）の定義を次のように定める。~~
この法律障害者総合福祉法が対象とするにおいて障害者（障害児を含む）とは、障害者基本法第二条第一項に規定する障害者をいう。身体的又は精神的な機能障害を有する者であつて、その機能障害と環境に起因する障壁との間の相互作用により、日常生活又は社会生活に制限を受ける者をいう。

障害者基本法（平成23年8月5日公布）

第二条 この法律において、次の各号に掲げる用語の意義は、それぞれ当該各号に定めるところによる。

- 一 障害者 身体障害、知的障害、精神障害（発達障害を含む。）その他の心身の機能の障害（以下「障害」と総称する。）がある者であつて、障害及び社会的障壁により継続的に日常生活又は社会生活に相当な制限を受ける状態にあるものをいう。
- 二 社会的障壁 障害がある者にとって日常生活又は社会生活を営む上で障壁となるような社会における事物、制度、慣行、観念その他一切のものをいう。

~~【要検討】「本法の支援を必要とする者」を定義に含めるべきという提案があるが、第一に相談支援等は障害が確定されない段階から支援の対象とされるべきであり、第二に本来総合福祉法で規定されるべき支援が規定されない場合又は不足している場合、それらについてはそれを求めることができなくなることはないのか。~~

- 上記の定義における心身の機能の障害には、身体障害、知的障害、精神障害（発達障害を含む。）その他の心身の機能障害（慢性疾患に伴う機能障害を含む）を含むものとする。

【説明】

(1) 「谷間」を生まない包括的規定について

これまでの国際的、国内的確認を踏まえれば、支援を必要としている全ての障害者をもれなく支援の対象とする規定を設ける方向性べきことは、全ての関係者で共有されている。また、年齢の規定を設けることによって支援の対象から排除されることのないように、障害者の定義に障害児を含むものとしてことを明記規定した。

(2) ~~「身体的または精神的な「心身の機能の障害」について~~

改正された—障害者基本法の障害は、身体障害、知的障害、精神障害（発達障害を含む。）その他の心身の機能の障害が含まれることから、包括的な規定となっている。

~~障害者権利条約1条の「身体的、精神的、知的又は感覚的な機能障害」や障害者基本法改正案（2011年4月522日公布閣議決定）の「身体障害、知的障害、精神障害その他の心身の機能の障害」という規定があることから、例示列挙的な規定も考えられたが、例示以外が実際的には除外される危険性が高まり、新たな障害が発見・認知される度に法改正作業が必要となるなど、多くの問題がある。そこで、法律上の障害者の定義は包括的なものを基本として掲げ機能障害については、「身体障害、知的障害、精神障害（発達障害を含む。）その他の心身の機能障害（慢性疾患に伴う機能障害を含む）」を含むという形で、例示した。~~

もともと、本件を検討した作業チーム報告は、障害者を「身体的または精神的な機能障害（慢性疾患に伴う機能障害を含む）を有する者と、この者に対する環境に起因する障壁との間の相互作用により、日常生活又は社会生活に制限を受ける者をいう」とまとめている。これは、特定の障害名に着目し例示列挙した場合に、例示列挙されない障害が除外される危険性があることを考慮し、包括的な規定とするべきであるという趣旨である。これは必ずしも障害者基本法の規定ぶりと矛盾するものではないので、法律で使われる文言を本骨格提言においても障害者基本法の定義との整合性を図る観点から採用した。

なお、障害者基本法の「機能の障害」は、世界保健機構（WHO）の「機能障害」であり、この概念については、世界保健機構（WHO）により、国際障害分

類ICIDH（ICIDH国際障害分類，1980年）において、「機能障害（impairments）」は「心理的、生理的又は解剖的な構造又は機能のなんらかの喪失又は異常である」と規定され、国際生活機能分類ICF（ICF国際生活機能分類，2001年）においても、「著しい変異や喪失などといった、心身機能または身体構造上の問題」とし、その網羅的な分類項目も示されている。

また、障害者権利条約においても、「障害（disability）」や障害者の概念を整理する要素として「機能障害（impairments）」が使われており、ICF分類は、「障害の理解や適切な施策推進等の観点からその活用方策を検討する。」（2002年障害者基本計画）とあり、世界的にも公知のものとなっている。

(3) 「慢性疾患に伴う機能障害を含む」について

障害者基本法の改正審議においては、上記の障害者基本法の「障害」に、難病に起因する機能障害が含まれることや、「継続的に」は断続的なもの、周期的なものが含まれることが確認されている。ただし、障害者基本法には、「その他の心身の機能の障害」に慢性疾患に伴う機能障害を含めることが明示されてはいないため、それを明らかにするために文言を加えることとした。

難病等の慢性疾患に罹患した者は、疾患に対する医療的サービスとともに、生活の支障に対する福祉的サービスの両方が必要となる場合が多い。しかし難病などで症状が変動する場合には「障害」と認定されず生活支援から除外されるのが一般的である。この現状に照らせば、慢性疾患による機能障害の存在を明らかにする必要があるため、この文言を注意的に規定した。

(4) 「環境に起因する障壁との間の相互作用障害及び社会的障壁による制限」について

障害者基本法では、障害及び社会的障壁により日常生活又は社会生活に相当な制限を受ける状態にある者も障害者としており、社会的障壁には、障害者の日常生活又は社会生活で障壁となるもの全般が含まれる。

障害者権利条約の前文（E）項を参考に、「障害」を、障害者が他の者と平等な立場で社会に参加することが制限されていることとして捉え、そうした参加の制限が環境の障壁との相互作用で生じていることを示すものである。なおこれは参加の制限を解決するために障壁除去が重要であることを一般的に示すための説明であって、従来の福祉サービスの提供は機能障害を中心に提供されてきたが、障害者総合福祉法において、社会的障壁を定義に取り込むことにより、この障壁を除去するという観点から必要な支援が提供されることが求められることになる。改めて、この意義が確認されなければならない。本法支援の

~~対象者であるか否かを確認する際に、個々の障害者について具体的に障壁や相互作用を特定する必要はない。~~

~~(5) 「日常生活また又は社会生活のに制限」について~~

~~前述のように、「障害」を障害者が社会に参加することの制限として捉える以上、「生活」とは主要な活動であるか否かを問わず、また「制限」とは多大な支障であるか否かを問わず、広く解される必要がある。本の支援の対象者とすべきかどうかの主要な基準は、「制限」を受けている程度が「相当」であるか否かの有無ではなくよりも、その「制限」を解決するための支援の必要性の有無にあるよることを想起すべきである。~~